

2-3 調査結果

2-3-1 学校

本調査は、小学校・中学校・高等学校におけるV活動ツールの利用実態を把握するために実施されたものである。先に調査概要で示したように、214校を対象として124校から有効回答を得ることができた（回答率は57.9%）。

回答を得た124校の内訳としては、小学校80校（64.5%）、中学校36校（29.0%）、高等学校8校（6.5%）。そのため、本調査結果は小・中学校のデータが主流となっている。また、V活動ツールの実施時期は1994年4月から2003年11月まで様々だが、最頻値（最も多い実施開始時期）は2003年4月であるため、本調査は比較的新しく取り組んだ学校の実態が反映されていることにも留意されたい。

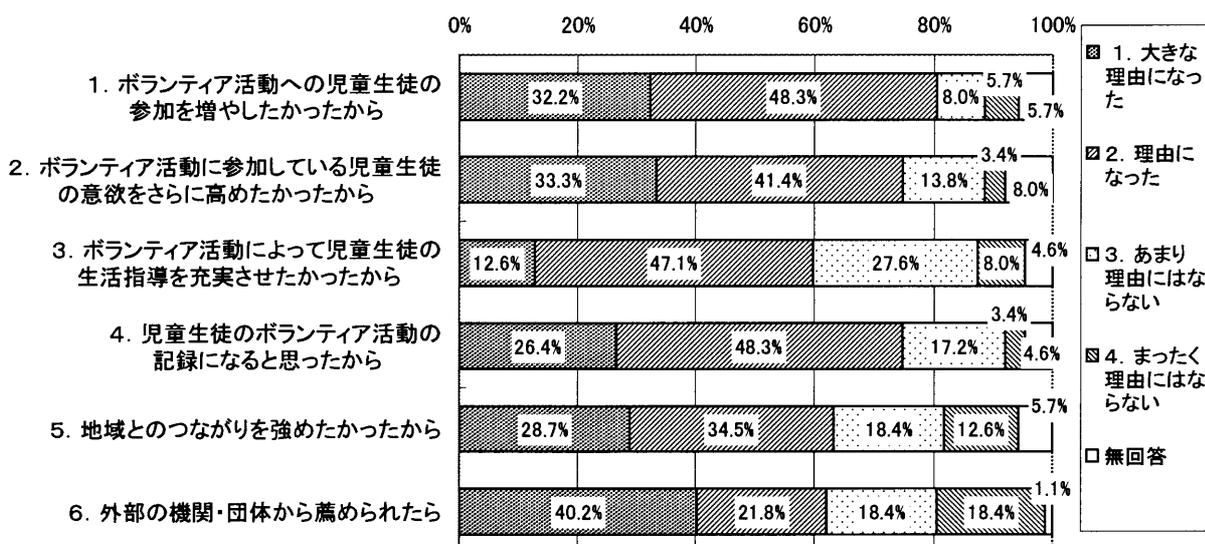
以下、調査結果について、要点をまとめながら報告する。

< 単純集計 >

(1) 導入の目的

V活動ツールの導入理由について質問したところ、「大きな理由になった」および「理由になった」の回答が最も多かったのが「ボランティア活動への児童生徒の参加を増やしたかったから」であり、次いで、「ボランティア活動に参加している児童生徒の意欲を高めたかったから」「児童生徒のボランティア活動の記録になると思ったから」となった。

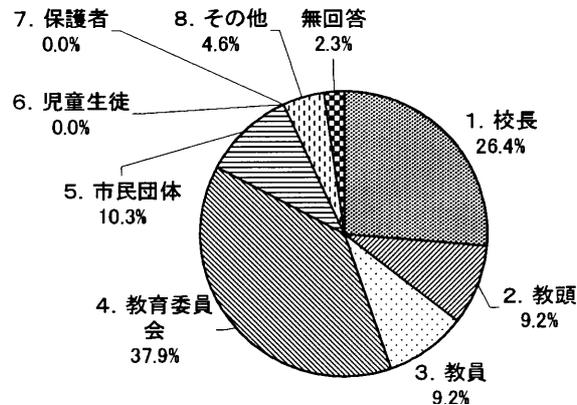
図表 学-1 V活動ツールを活用した理由（きっかけ）



また、このV活動ツールの提案者については、「教育委員会」（37.9%）が最も多く、次いで「校長」（26.4%）、「市民団体」（10.3%）」となった。この結果から、管理者からの提案が多いこ

とがうかがえる。

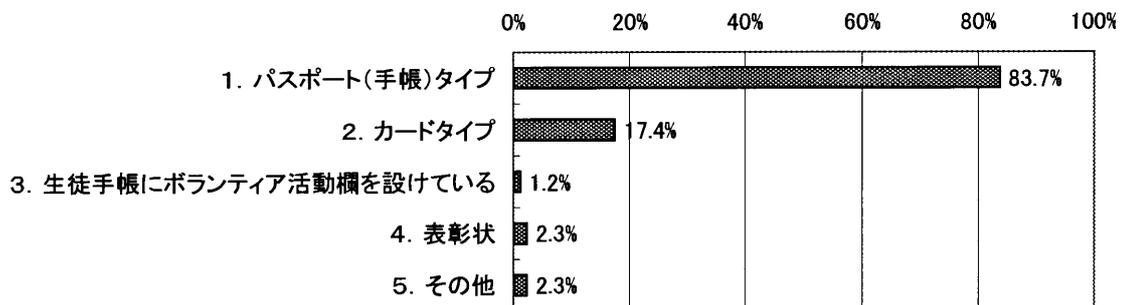
図表 学-2 提案者



(2) V活動ツールの形態・内容

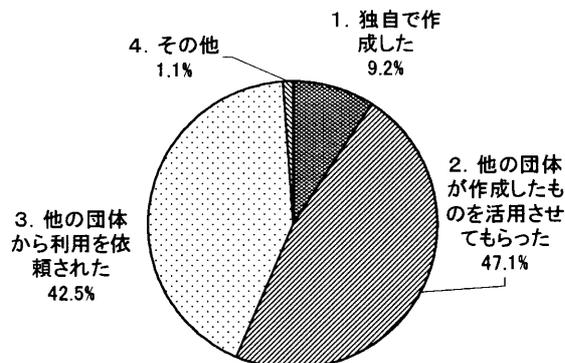
使用されているV活動ツールの形態について質問したところ、「パスポート(手帳)タイプ」と回答した学校が83.7%と多くを占めており、次いで「カードタイプ」が17.4%となった(複数回答)。この結果から、学校で使用されているV活動ツールはこの2タイプに集約されていると言えるだろう。

図表 学-3 形態



また、V活動ツールの開発状況については「他の団体が作成したものを活用させてもらった」が47.1%となり、次いで「他団体から利用を依頼された」が42.5%となっている。他団体のツールを利用している割合は合計89.6%となり、「独自で作成した」団体は9.2%にとどまっている。

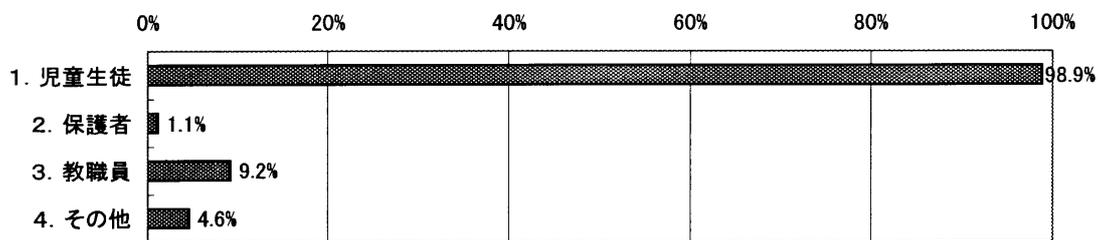
図表 学-4 開発状況



さらに、V活動ツールの配布対象者は「児童生徒」が98.9%とほとんどであり、ボランティア

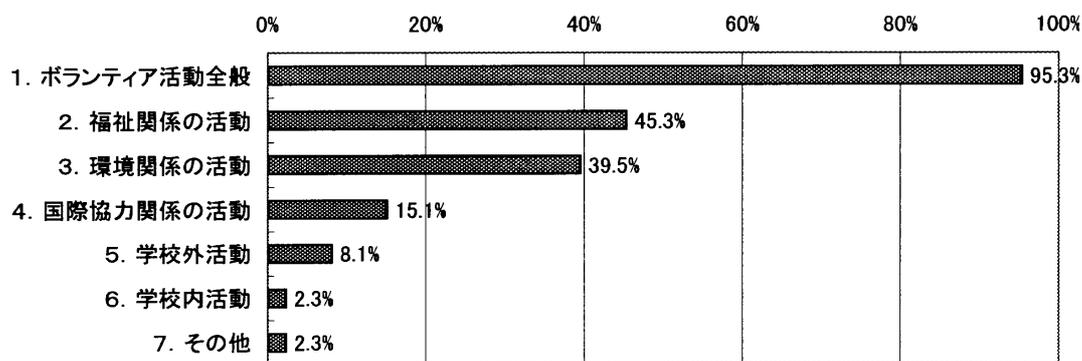
活動を推進していく立場である「教職員」(9.2%)や「保護者」(1.1%)への配布は若干となった(複数回答)

図表 学-5 配布対象者



次に、V活動ツールの内容について整理してみると、V活動ツールの対象となる活動については、「ボランティア活動全般」が95.3%とほとんどであり、次いで「福祉関係の活動」(45.3%)、「環境関係の活動」(39.5%)、「国際協力関係の活動」(15.1%)、「学校外活動」(8.1%)、「学校内活動」(2.3%)となった(複数回答)

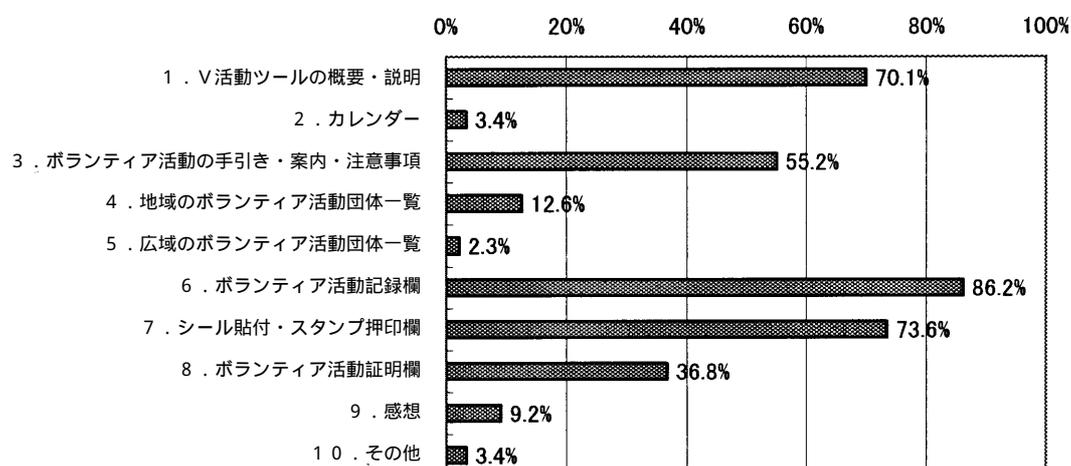
図表 学-6 対象となる活動



(5、6は、1～4の活動には該当しない活動)

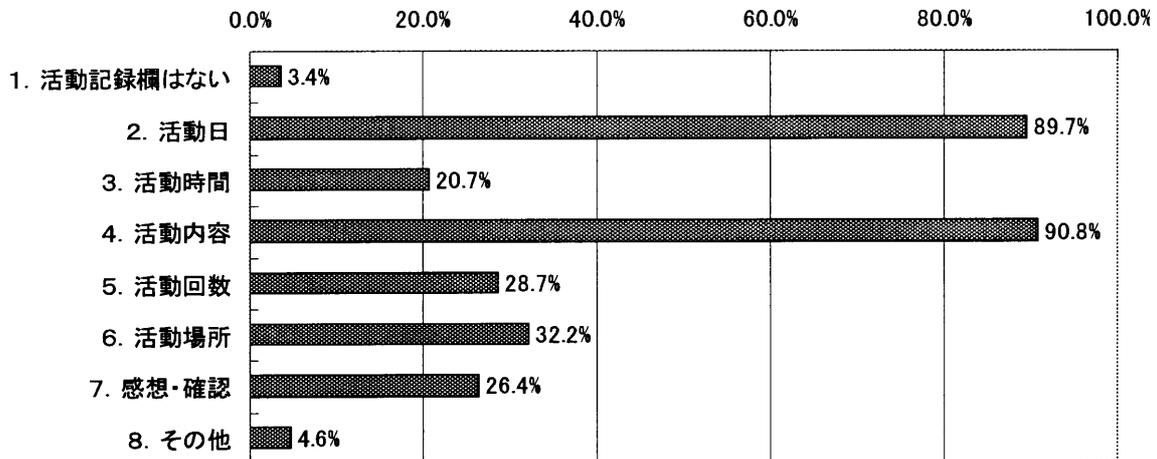
V活動ツールに掲載されている内容については「ボランティア活動記録欄」が最も多く86.2%を占めている。それ以外では「シール貼付・スタンプ押印欄」(73.6%)、「V活動ツールの概要・説明」(70.1%)、「ボランティア活動の手引き・案内・注意事項」(55.2%)となっている(複数回答)。実績を残せるような、また、活動を振り返れるような仕組みが施されているものが多い。

図表 学-7 掲載内容



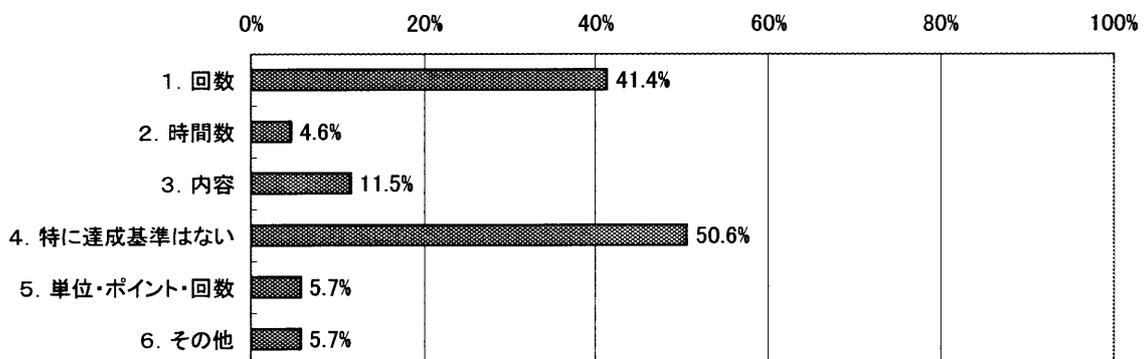
記録の内容について質問すると「活動内容」(90.8%)「活動日」(89.7%)の占める割合が高く、それ以外は「活動場所」(32.2%)「活動回数」(28.7%)「感想・確認」(26.4%)「活動時間」(20.7%)となっている(複数回答)。

図表 学-8 記録内容



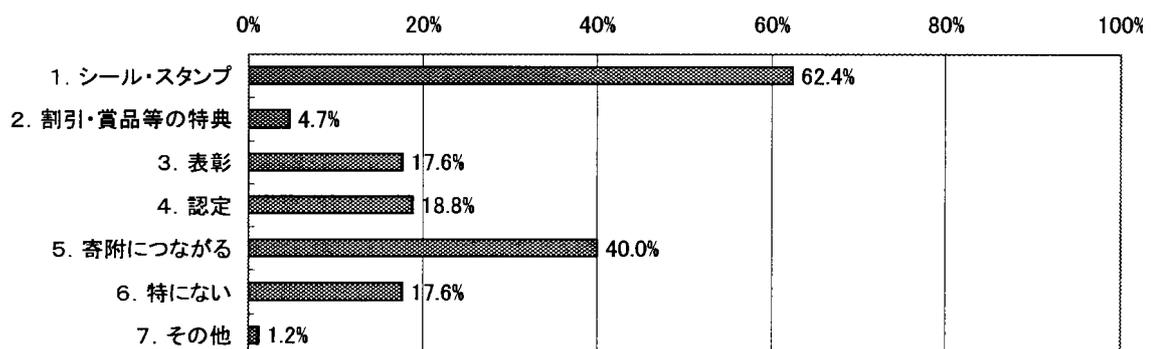
達成基準については「特に達成基準はない」(50.6%)「回数」(41.4%)と回答している学校が多く、内容、単位・ポイント、時間数は少数となっている(複数回答)。

図表 学-9 達成基準



さらに、V活動ツールの利用を促進させようとするインセンティブについては「シール・スタンプ」(62.4%)と「寄附につながる」(40.0%)が多く、次いで「認定」(18.8%)「表彰」(17.6%)「特にない」(17.6%)となった(複数回答)。

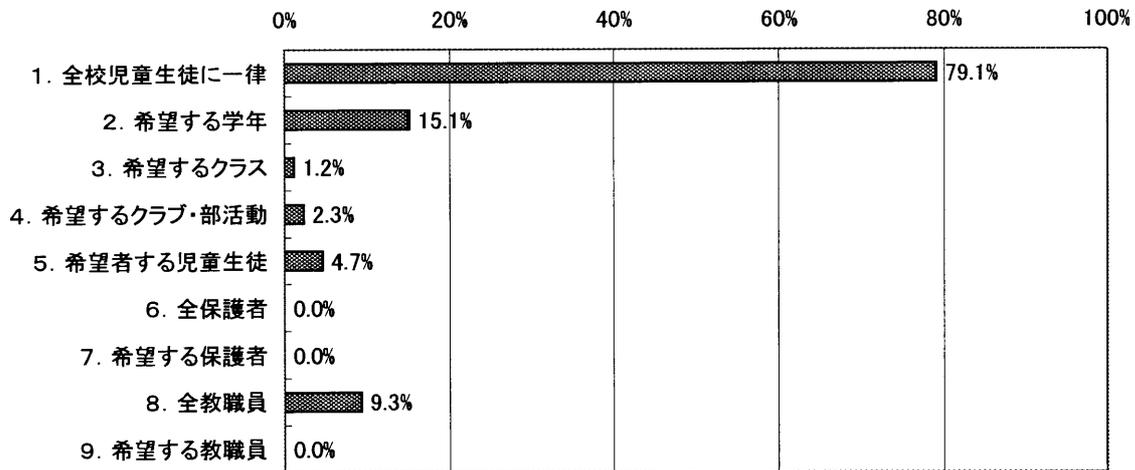
図表 学-10 インセンティブの内容



(3) 実施の方法

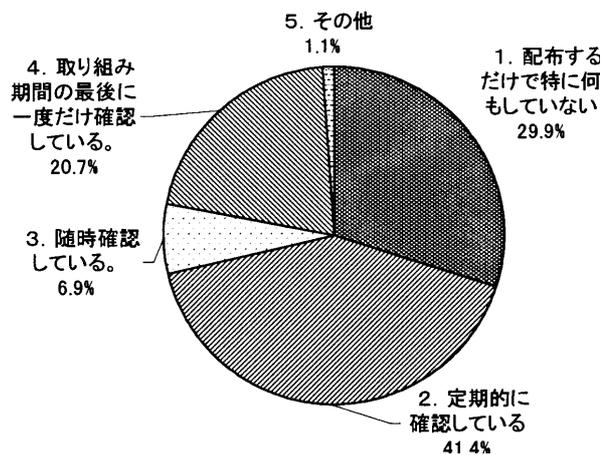
V活動ツールの配布単位について質問したところ「全校児童生徒に一律」に配布している学校は79.1%となった。次いで「希望する学年」(15.1%)、「全教職員」(9.3%)となっている(複数回答)。

図表 学-11 配布単位



また、配布後の確認方法については「定期的に確認している」が41.4%と最も高く、次いで「配布するだけで特に何もしていない」(29.9%)、「取り組み期間の最後に一度だけ確認している」(20.7%)、「随時確認している」(6.9%)となった。

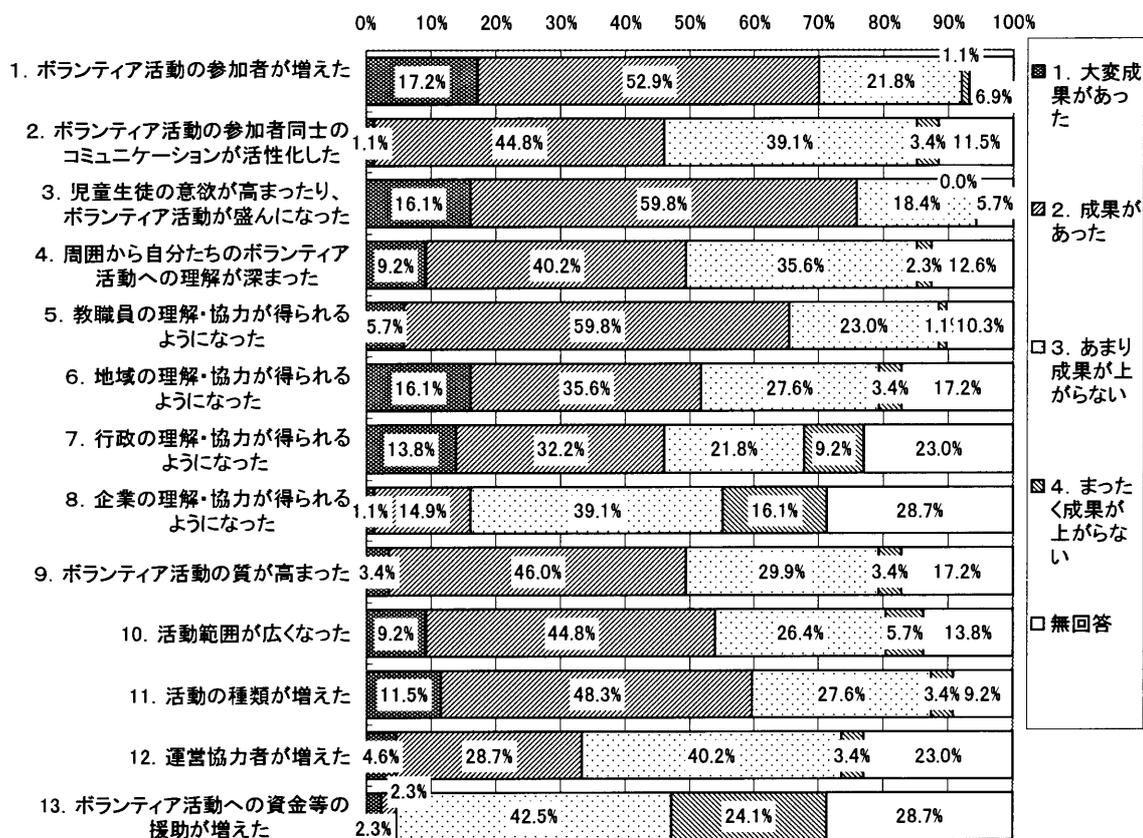
図表 学-12 把握のしかた



(4) 導入の成果・評価

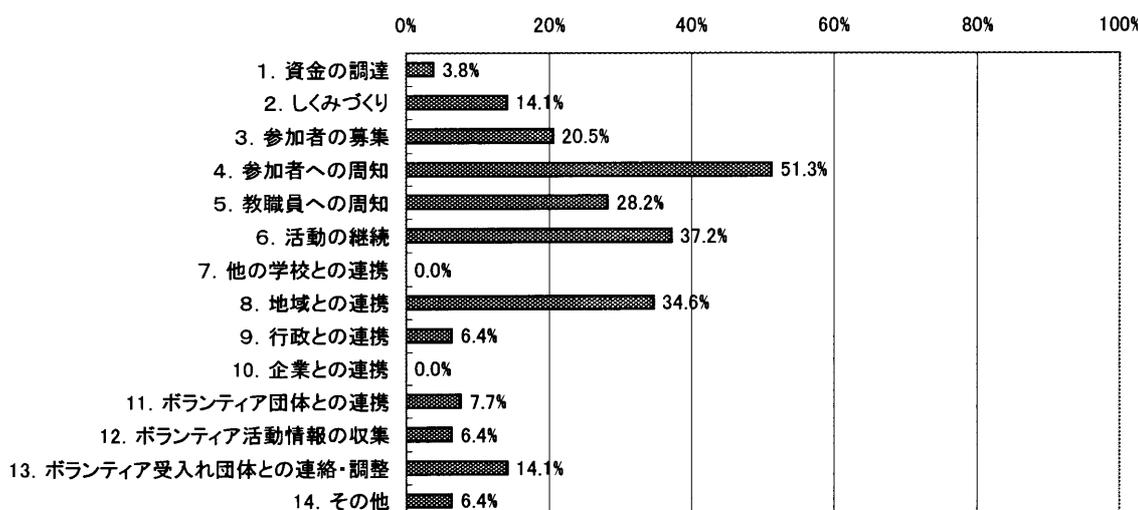
今回、配布数については、平成14年度が平均414.9枚(34校)、15年度は259.7枚(85校)となっている。導入したことによる成果については、「児童生徒の意欲が高まったり、ボランティア活動が盛んになった」「ボランティア活動の参加者が増えた」「教職員の理解・協力が得られるようになった」に成果を得たが、「ボランティア活動への資金等の援助が増えた」「企業の理解・協力が得られるようになった」「運営協力者が増えた」についての成果はあまり得られていない。

図表 学-13 導入の成果



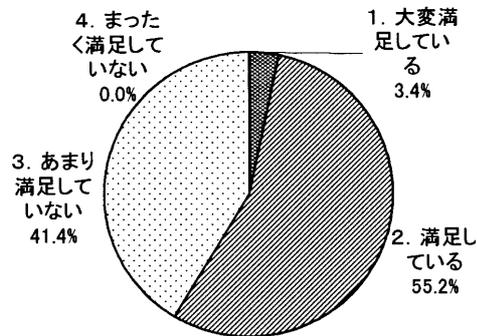
また、V活動ツールを活用する際に苦労した点の上位には「参加者への周知」「活動の継続」「地域との連携」などが挙げられている（複数回答）。

図表 学-14 V活動ツールを活用する際に苦労した点



V活動ツールの満足度については「大変満足している」「満足している」が合わせて58.6%となっており、逆に「あまり満足していない」が41.4%となった。このように、V活動ツールを使用している学校の約6割が、現在の使用状況に満足していることがわかる。

図表 学-15 満足度



(5) ボランティアに対する意識

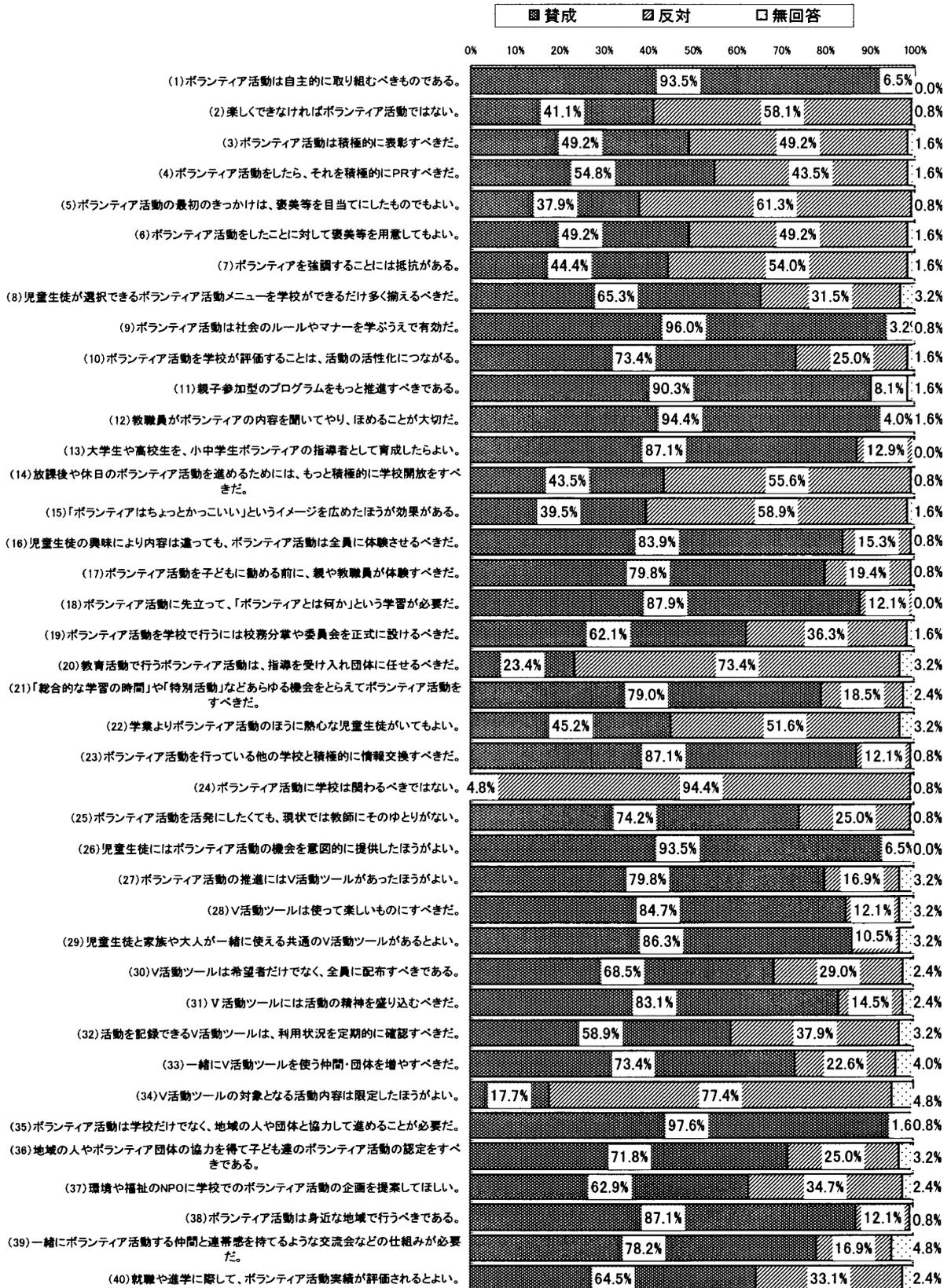
今回の調査ではV活動ツールの実態調査だけでなく、回答者（校長、教頭、ボランティア担当教員等）に「ボランティア」に対する意識についても質問した。40の質問を設け、その回答も「賛成する」「賛成しない」の二者択一での回答となっている。

このうち、最も多く「賛成する」と回答した質問は「(35)ボランティア活動は学校だけでなく、地域の人や団体と協力して進めることが必要だ」(97.6%)となった。次いで「(9)ボランティア活動は社会のルールやマナーを学ぶうえで有効だ」(96.0%)、「(12)教職員や大人がボランティアの内容を聞いてやり、ほめることが大切だ」(94.4%)、「(1)ボランティア活動は自主的に取り組むべきものである」(93.5%)、「(26)児童生徒にはボランティア活動の機会を意図的に提供したほうがよい」(93.5%)となった。

「賛成しない」順としては、「(24)ボランティア活動に学校は関わるべきではない」(94.4%)、「(34)V活動ツールの対象となる活動内容は限定したほうがよい」(77.4%)、「(20)教育活動で行うボランティア活動は、指導を受け入れ団体に任せるべきだ」(73.4%)、「(5)ボランティア活動の最初のきっかけは、褒美等を目当てにしたものでもよい」(61.3%)、「(15)『ボランティアはちょっとカッコいい』というイメージを広めたほうが効果がある」(58.9%)となった。

全体的には児童生徒がボランティア活動に参加することを肯定し、さらに教育の一環として位置づけている傾向がうかがえる。

図表 学-16 ボランティアに対する意識



< クロス集計 >

単純集計では学校調査における全体像を整理することができたが、これに加えてクロス集計をすることによって、さらにその回答の傾向や特徴が明らかになっている。そこで、ここでは主なクロス集計結果についてまとめておく。ただし、非該当・無回答の集計は除外しており、単純集計の数字とは差異があるので注意されたい。

(1) 導入の目的

まず、V活動ツールの導入理由を校種別に分析すると、小学校では「ボランティア活動への児童生徒の参加を増やしたかったから」(86.5%)、中学校では「ボランティア活動に参加している児童生徒の意欲をさらに高めたかったから」(95.7%)が最も多い回答となった。ボランティア活動への参加・継続を目的としてV活動ツールが利用されていることが、この結果からうかがえる。

図表 学-17 校種別導入の理由

	1. 参加者を増やしたい	2. 意欲を高めたい	3. 生活指導の充実	4. 記録になる	5. 地域とのつながり強化	6. 外部からの推薦
全体集計	85.4%	81.3%	62.7%	78.3%	67.1%	62.8%
小学校	86.5%	74.0%	62.3%	77.4%	71.2%	63.0%
中学校	82.6%	95.7%	56.5%	82.6%	65.2%	68.0%
高等学校	85.7%	85.7%	85.7%	71.4%	42.9%	42.9%

提案者を校種別で分析すると、小・中学校では「教育委員会」からの提案が多かった。このことから、小・中学校における導入のきっかけは、自発的な導入よりは外部からの推奨によって使用されているケースが多い傾向にある。

図表 学-18 校種別提案者

	1. 校長	2. 教頭	3. 教員	4. 教育委員会	5. 市民団体	6. 児童生徒	7. 保護者	8. その他
全体集計	27.1%	9.4%	9.4%	38.8%	10.6%	0.0%	0.0%	4.7%
小学校	22.6%	9.4%	7.5%	41.5%	13.2%	0.0%	0.0%	5.7%
中学校	32.0%	8.0%	12.0%	40.0%	8.0%	0.0%	0.0%	0.0%
高等学校	42.9%	14.3%	14.3%	14.3%	0.0%	0.0%	0.0%	14.3%

(2) V活動ツールの形態・内容

ツール開発状況を校種別に見ると、高等学校では57.1%が独自で作成しているが、小学校では0.0%となっている。これは、校種別提案者のクロス集計で「教育委員会」等の外部からの推奨が小・中学校に多かったことが、少なからず影響していると考えられる。

図表 学-19 校種別ツール開発状況

	1. 独自で作成	2. 他の団体のも のを活用	3. 他の団体から 依頼	4. その他
全体集計	9.2%	47.1%	42.5%	1.1%
小学校	0.0%	54.5%	43.6%	1.8%
中学校	16.0%	36.0%	48.0%	0.0%
高等学校	57.1%	28.6%	14.3%	0.0%

次に、対象となる活動を校種別に見ると、特に高等学校においては「福祉関係の活動」(71.4%)を対象としているところが多い。これは、地域には福祉・医療関係施設が多いことと、福祉・医療関係施設側としても、自立度の高い高校生のほうが受け入れやすいことも考えられる。

図表 学-20 校種別対象となる活動

	1. V活動	2. 福祉	3. 環境	4. 国際	5. 学校外	6. 学校内	7. その他
全体集計	95.3%	45.3%	39.5%	15.1%	8.1%	2.3%	2.3%
小学校	96.3%	40.7%	40.7%	14.8%	9.3%	1.9%	3.7%
中学校	92.0%	48.0%	36.0%	16.0%	4.0%	4.0%	0.0%
高等学校	100.0%	71.4%	42.9%	14.3%	14.3%	0.0%	0.0%

校種別掲載内容に着目すると、全体で3番目に割合が高かった「V活動ツールの概要・説明」が、小・中学校では74.5%・76.0%と比率が高いのに対して、高等学校は14.3%と低い。これは、小・中学校ではボランティア活動を児童生徒に理解してもらいたいという願いと同時に教育的要素を盛り込んでいることが考えられるが、高等学校の場合は「ボランティア活動記録欄」(100%)「ボランティア活動証明欄」(71.4%)が他校種より高いことから、概要説明などの理念的な要素よりもボランティア活動の実績を評価しようとする傾向がうかがえる。

図表 学-21 校種別掲載内容

	1. 概要・ 説明	2. カレン ダー	3. 手引 き・案内・ 注意事項	4. 地域の 活動団体 一覧	5. 広域の 活動団体 一覧	6. 活動 記録欄	7. シー ル・スタ ンプ	8. 活動証 明欄	9. 感想	10. その 他
全体集計	70.1%	3.4%	55.2%	12.6%	2.3%	86.2%	73.6%	36.8%	9.2%	3.4%
小学校	74.5%	3.6%	56.4%	12.7%	1.8%	87.3%	78.2%	29.1%	12.7%	1.8%
中学校	76.0%	4.0%	48.0%	16.0%	4.0%	80.0%	68.0%	44.0%	4.0%	8.0%
高等学校	14.3%	0.0%	71.4%	0.0%	0.0%	100.0%	57.1%	71.4%	0.0%	0.0%

また達成基準について、特に高等学校では「特に達成基準はない」傾向(85.7%)が他校種と比較して顕著となった。

図表 学-22 校種別達成基準

	1. 回数	2. 時間数	3. 内容	4. 特に達成基準はない	5. 単位・ポイント・回数	6. その他
全体集計	41.4%	4.6%	11.5%	50.6%	5.7%	5.7%
小学校	45.5%	5.5%	14.5%	45.5%	7.3%	5.5%
中学校	40.0%	4.0%	8.0%	52.0%	4.0%	4.0%
高等学校	14.3%	0.0%	0.0%	85.7%	0.0%	14.3%

校種別のインセンティブを見ると「シール・スタンプ」をインセンティブとして捉えている校種は小学校に多く（74.1%）、中学校、高等学校となるにつれてその割合は低くなっていく傾向となった。

図表 学-23 校種別インセンティブ

	1. シール・スタンプ	2. 割引・賞品等の特典	3. 表彰	4. 認定	5. 寄附につながる	6. 特にない	7. その他
全体集計	62.4%	4.7%	17.6%	18.8%	40.0%	17.6%	1.2%
小学校	74.1%	3.7%	16.7%	14.8%	46.3%	14.8%	1.9%
中学校	44.0%	8.0%	16.0%	28.0%	28.0%	16.0%	0.0%
高等学校	33.3%	0.0%	33.3%	16.7%	33.3%	50.0%	0.0%

（3）実施の方法

実施方法についても、校種別によって違いが現れている。

配布単位を校種別に見ると、中・高等学校の「全校児童生徒に一律」は92.0%・83.3%と高いのに対し、小学校は72.7%にとどまっている。一方、「希望する学年」に着目すると、中・高等学校は0.0%であるのに対し、小学校は23.6%となっている。このことから、小学校教員のV活動ツールに対する主体的な取り組みの姿勢の高さがうかがえる。

また、このような傾向について、小学校の児童年齢層は6年間という幅の広さから、全校一律ではV活動ツールを配布できないと判断しているとも考えられる。

図表 学-24 校種別配布単位

	1. 全校児童生徒に一律	2. 希望する学年	3. 希望するクラス	4. 希望するクラブ・部活動	5. 希望する児童生徒	6. 全保護者	7. 希望する保護者	8. 全教職員	9. 希望する教職員
全体集計	79.1%	15.1%	1.2%	2.3%	4.7%	0.0%	0.0%	9.3%	0.0%
小学校	72.7%	23.6%	1.8%	1.8%	3.6%	0.0%	0.0%	10.9%	0.0%
中学校	92.0%	0.0%	0.0%	0.0%	8.0%	0.0%	0.0%	8.0%	0.0%
高等学校	83.3%	0.0%	0.0%	16.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

配布後の確認方法を校種別に見ると、小・中学校は「定期的に確認している」が43.6%・44.0%と高いが、高等学校では14.3%と低くなっている。このことから、高等学校は生徒の自主性に任せている傾向がうかがえる。

図表 学-25 校種別配布後の確認方法

	1. 何もしていない	2. 定期的に確認	3. 随時確認	4. 最後に一度だけ確認	5. その他
全体集計	29.9%	41.4%	6.9%	20.7%	1.1%
小学校	23.6%	43.6%	9.1%	21.8%	1.8%
中学校	40.0%	44.0%	0.0%	16.0%	0.0%
高等学校	42.9%	14.3%	14.3%	28.6%	0.0%

(4) 導入の成果・評価

V活動ツールの導入による成果を校種別に見ると、特に小学校では「活動範囲が広がった」「活動の種類が増えた」という成果を他校種よりも高く得ている。これは、日常では行動範囲(地域)の広がらない小学生であっても、ボランティア活動に参加することによって行動範囲が広がったと考えることができる。そのため、このような評価につながったのだろう。

図表 学-26 校種別導入の成果

	1. 参加者数	2. コミュニケーション	3. 意欲	4. 周囲の理解	5. 教職員の理解・協力	6. 地域の理解・協力	7. 行政の理解・協力	8. 企業の理解・協力	9. 質の向上	10. 活動範囲が広がる	11. 活動の種類が増加	12. 運営協力者の増加	13. 資金援助
全体集計	75.3%	51.9%	80.5%	56.6%	73.1%	62.5%	59.7%	22.6%	59.7%	62.7%	65.8%	43.3%	6.5%
小学校	84.3%	55.3%	84.9%	54.3%	75.0%	68.9%	53.7%	21.6%	63.6%	70.2%	74.5%	40.0%	5.4%
中学校	62.5%	45.8%	73.9%	58.3%	66.7%	50.0%	76.2%	28.6%	52.2%	52.2%	52.2%	52.2%	5.0%
高等学校	50.0%	50.0%	66.7%	66.7%	83.3%	60.0%	40.0%	0.0%	60.0%	40.0%	40.0%	25.0%	20.0%

V活動ツール配布後の確認方法について、満足度別にその傾向を見ると「定期的に確認」している学校は満足度が高いが、「配布するだけで特に何もしていない」と回答している学校は「あまり満足していない」に回答している割合が高い。これは、定期的に確認するほうが児童生徒によるボランティア活動の内容やV活動ツールの活用状況を把握することができるためと考えられる。

図表 学-27 確認方法別満足度

	1. 大変満足	2. 満足	3. あまり満足していない	4. まったく満足していない
全体集計	3.4%	55.2%	41.4%	0.0%
配布のみ	0.0%	38.5%	61.5%	0.0%
定期的に確認	5.6%	72.2%	22.2%	0.0%
随時・最後に一度	4.2%	45.8%	50.0%	0.0%

記録内容を表側においた小・中学校別・満足度別多重クロス集計を見ると、「活動時間」・「活動回数」・「活動場所」といった活動の量・質に満足度を求めているのは中学校であり、感想・確認といった経験や活動を振り返って見直す機会を設けることについて満足度を求めているのが小学校となった。

図表 学-28 校種・満足度別記録内容

		1. 記録欄はない	2. 活動日	3. 活動時間	4. 活動内容	5. 活動回数	6. 活動場所	7. 感想・確認	8. その他
全体集計		3.4%	89.7%	20.7%	90.8%	28.7%	32.2%	26.4%	4.6%
小学校	満足	6.7%	86.7%	6.7%	93.3%	23.3%	23.3%	43.3%	3.3%
	不満足	4.0%	96.0%	4.0%	92.0%	16.0%	24.0%	24.0%	8.0%
中学校	満足	0.0%	83.3%	50.0%	83.3%	50.0%	55.6%	11.1%	5.6%
	不満足	0.0%	85.7%	57.1%	85.7%	14.3%	28.6%	14.3%	0.0%

V活動ツール満足度別に導入理由を分析すると、「ボランティア活動への児童生徒の参加を増やしたかったから」「ボランティア活動に参加している児童生徒の意欲をさらに高めたかったから」を導入理由に挙げている学校はV活動ツールの満足度が高く、「外部の機関・団体から薦められたから」を導入理由に挙げている学校は「あまり満足していない」と回答している割合が高い。

図表 学-29 満足度別導入理由

	1. 参加者を増やしたい	2. 意欲を高めたい	3. 生活指導の充実	4. 記録になる	5. 地域とのつながり強化	6. 外部からの推薦
全体集計	85.4%	81.3%	62.7%	78.3%	67.1%	62.8%
満足	93.9%	91.5%	67.3%	83.7%	68.8%	54.9%
不満足	72.7%	66.7%	55.9%	70.6%	64.7%	74.3%

(5) ボランティアに対する意識

V活動ツールの作成が「教育委員会・管理者」「市民団体」の場合と「教員」の場合では、「放課後や休日の学校開放」「ボランティアは『ちょっとかっこいい』というイメージがあったほうがいい」という項目について「賛成する」と答えた割合は「教員」の方が高く、両者に大きな違いが見られた。

図表 学-30 質問9(14)(15)に「賛成」の割合

	14. 学校開放	15. かっこいい
全体集計	43.9%	40.2%
教育委員会・管理者	47.6%	46.8%
教員	75.0%	75.0%
市民団体	44.4%	33.3%

また、V活動ツールの確認方法が「配布するだけで特に何もしない」の場合と「定期的に確認している」の場合では、「教育活動で行うボランティア活動は指導を受け入れ団体に任せるべき」の回答に大きな違いが現れた。

図表 学-31 質問9(20)に賛成の割合

	20. 受入団体が指導
全体集計	28.6%
配布のみ	52.0%
定期的に確認	5.7%
随時・最後に一度	21.7%

V活動ツールの満足度に注目してみると、「ボランティア活動は積極的に表彰すべきだ」「ボランティア活動をしたら、それを積極的にPRすべきだ」「児童生徒が選択できるボランティア活動メニューを学校ができるだけ多く揃えるべきだ」の意識については、満足と不満足で大きな差が出ている。ボランティア活動に対する学校側の積極的な姿勢によって、V活動ツールの満足度は大きな影響を受けると考えられるだろう。

図表 学-32 質問9(3)(4)(8)に「賛成」の割合

	3. 表彰	4. PR	8. メニュー
全体集計	50.0%	55.7%	67.5%
満足	60.8%	64.7%	78.4%
不満足	28.6%	45.7%	48.6%